

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査の目的と経過

知床の玄関口にあたるウトロ地域には数多くの遺跡がみられ、豊かな自然と人々の営みの歴史を現在に伝えている。しかし、2004（平成16）年度から実施された国道改良工事によってその一部は破壊され、残されているものも風化による自然崩壊の危機に瀕しており、保護が求められる状況に直面していた。もっとも、こうした開発工事に伴う発掘調査によって得られる情報も多く、市街地の中心に位置するウトロ遺跡では縄文時代からオホーツク文化期までの多くの遺構が検出され、ウトロの地域史の基礎的な資料が蓄積されてきた。

そうした折、知床が世界自然遺産に登録されることとなり、知床の自然の価値がクローズアップされる一方で、地域住民からは歴史的な価値のある文化財を活用して地域の活性化を図りたいという要望が斜里町教育委員会に寄せられていた。これを受け、町教委ではウトロ地域において保存状態の良いチャシコツ岬上遺跡を調査対象とし、遺跡の保存を目的とした学術調査を計画した。

これまで、チャシコツ岬上遺跡に関する情報は少なく、1949（昭和24）年に北海道学芸大学（現北海道教育大学）の河野広道博士らによる北海道東北部の考古学的調査の一環として行われたものが唯一の発掘事例であった。調査記録によると、岬先端部付近（A号）と丘頂部（B号）の2箇所の竪穴を試掘し、「竪穴内からオホーツク土器、竪穴付近から北筒土器が出土する（宇田川編1981）」ことから、竪穴群がオホーツク文化期に属するものであることが明らかとなった。

その後、1977（昭和52）年には北海道大学の井晴男教授らにより遺跡全体の地形測量調査が実施され、30棟におよぶ竪穴住居跡の存在が確認された（大井1984）。こうした調査によってその学術的価値が高いことは認識されてきたものの本遺跡の全貌は依然として不明確なままであった。

そのため、チャシコツ岬上遺跡の価値と位置付けを明確化するべく、斜里町教育委員会による5ヶ年に及ぶ内容確認調査を実施することになった。各年度の調査の経過は以下の通りである。

2013（平成25）年度はチャシコツ岬上遺跡の基本層位の確認、利用時期の確定、集落構造の調査を目的とし

て、中位海岸段面上に大きく3段見られる平坦面の中位平坦地に3列のトレンチ（TR1、TR2、TR3）を掘削した。TR1からはオホーツク文化の土坑1基、TR2からは同時期の配石遺構を検出し、集落内における空間利用の一端を知るに至った。また、検出遺構および出土遺物から、利用時期はオホーツク文化終末期が主体となることが確認され、目的としていた成果を十分に得ることができた。なお、2013（平成25）年度の調査結果については報告済みである（平河内2014）。

2ヶ年目にあたる2014（平成26）年度は、引き続き中位平坦地でのトレンチ調査（TR4）を継続するとともに、岬の縁辺部において自然崩壊の危機に瀕していた5号竪穴住居跡（TR5）の発掘調査に着手した。TR4からはオホーツク文化の土坑墓1基と、土坑2基を検出し、内容確認のために完掘した。また、5号竪穴住居跡（TR5）は良好な保存状態であり、覆土中からトビニタイ土器を伴う配石遺構を検出したため、完掘は次年度以降へ先送りすることとなった。また委託業務として、遺跡全体の詳細な地形測量を実施し、竪穴住居跡等の正確な位置関係を把握した。

3ヶ年目の2015（平成27）年度は、5号竪穴住居跡（TR5）の調査を継続した。調査の結果、床面に大量の動物遺体と炭化材が残存していることが判明した。これらについてチャシコツ岬上遺跡調査検討委員会（以下、調査検討委員会）で検討した結果、2015（平成27）年度での完掘にこだわらず時間をかけて慎重な調査を行う必要があるとの指導を受け、調査方針を変更することとなった。

発掘調査最終年の2016（平成28）年度は、5号竪穴住居跡（TR5）の完掘、未調査であった高位平坦地でのトレンチ調査（TR6）、22号及び23号竪穴住居跡を覆うように形成された廃棄層（TR7）のコラムサンプリング調査を目的とし、約1ヶ月の調査を実施した。

2017（平成29）年度はこれら過去4ヶ年の発掘調査によって得られた資料を整理・分析し、文化庁や北海道教育委員会、調査検討委員会からの助言を受けながら成果の取りまとめを行い、総括報告書を作成した。

（松田功）

## 第2節 調査要項

事業名：町内遺跡発掘調査事業

事業者：斜里町

遺跡名：チャシコツ岬上遺跡（登録番号I-08-21）

所在地：斜里町ウトロ西地先国有林内1377林班は小班  
各年度の事業内容

平成25年度

事業期間 平成25年9月3日～平成26年3月28日

調査期間 平成25年9月3日～9月17日

整理期間 平成25年11月26日～平成26年3月28日

事業費 2,507千円（国庫補助額1,253千円）、

調査 面積20㎡

平成26年度

事業期間 平成26年9月2日～平成27年3月31日

調査期間 平成26年9月2日～9月30日

整理期間 平成26年10月1日～平成27年3月31日

事業費 4,853千円（国庫補助額2,426千円）、

調査面積40㎡

平成27年度

事業期間 平成27年8月29日～平成28年3月31日

調査期間 平成27年8月29日～10月10日

整理期間 平成27年9月24日～平成28年3月31日

事業費 2,895千円（国庫補助額1,447千円）、

調査面積27㎡

平成28年度

事業期間 平成28年8月30日～平成29年3月31日

調査期間 平成28年8月30日～10月8日

整理期間 平成28年9月16日～平成29年3月31日

事業費 5,852千円（国庫補助額2,926千円）、

調査面積37㎡

平成29年度

事業期間 平成29年5月9日～平成30年3月31日

整理期間 平成29年5月9日～平成30年3月31日

事業費 4,502千円（国庫補助額2,251千円）

調査体制

調査主体者：斜里町教育委員会 教育長 村田良介

事務局：斜里町立知床博物館 館長 山中正実

担当者：斜里町立知床博物館 学芸主幹 松田功

斜里町立知床博物館 学芸係 平河内毅

調査員：斜里町立知床博物館 学芸係 平河内毅

臨時職員 高橋鵬成（平成25・27年度）

臨時職員 大西凜（平成25年度）

臨時職員 工藤大（平成26年度）

臨時職員 服部太一（平成27・28年度）

発掘作業員：牧野睦美（平成25～26年度）、元木哲

之（平成25～27年度）、平田陽子（平成

26～28年度）、井上博之（平成26～28年

度）、湯浅秀明（平成26～28年度）、狩

野博之（平成27年～平成28年）、小松

努（平成28年度）、近藤政幸（平成28年

度）、日野康彦（平成28年度）、松本規

裕（平成28年度）、女部田かなみ（平成

28年度）、山田貴博（平成28年度）、平

井友里（平成28年度）

整理事業員：近藤富士子（平成25年度）、佐藤美由

樹（平成25年度）、丹治八千代（平成25

年度）、野口京子（平成25年度）、西塚

玲子（平成25～29年度）、牧野睦美（平

成25～26年度）、元木哲之（平成25～27

年度）、斉藤葵（平成26年度）、佐藤ト

モ子（平成26年度）、平田陽子（平成26

～29年度）、井上博之（平成26～29年

度）、湯浅秀明（平成26～29年度）、松

本規裕（平成28年度）、山田貴博（平成

28～29年度）、内田雪華（平成28～29年

度）、森陽子（平成28～29年度）、門間

勇（平成29年度）、佐藤雅彦（平成29年

度）

斜里町チャシコツ岬上遺跡調査検討委員会（平成27～  
29年度）

体制

委員長：白杵勲（札幌学院大学教授）

委員：熊木俊朗（東京大学大学院准教授）

委員：内山幸子（東海大学准教授）

現地指導および調査検討委員会出席者

水ノ江和同（文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門）  
近江俊秀（文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門）  
森先一貴（文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門）  
藤原秀樹（北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物

館課）

中田裕香（北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物  
館課）  
村本周三（北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物  
館課）

## 第3節 地理的環境

### 1. 地質概略

知床半島は約900万年前の海底火山活動から始まり、約100万年前から陸上の火山活動へと変わり現在の姿になった（勝井ほか2007）。海底火山活動はマグマの活動が激しい時代と、静かで堆積層が発達した時代があったことが露頭などから観察され、半島基部から岬の先端部へと地層が新しくなる。

チャシコツ崎付近には新第三紀の泥質団塊の含有を特徴とする遠音別川層（約400万年前）とシルトを挟む集塊岩で特徴づけられるウトロ層（約200万年前）が分布している。遠音別川層はチャシコツ崎より半島基部の南西の地域に広く分布し、凝灰質泥岩（頁岩）を主体とし、マグマが層の間でドーム状に固結した餅盤をしばしば含む。チャシコツ崎南西部にあるオシンコシン岬はそれにあたる。ウトロ層はチャシコツ崎より北東の地域に広く分布し、水冷破碎岩で形成されている。水冷破碎岩は地下深くから上昇してきたマグマが海水と接触し急冷されて礫や砂になった岩石で、活動の中心部ではしばしば上昇してきたマグマの岩脈が観察される。

### 2. チャシコツ崎および周辺の地理的・地質的環境

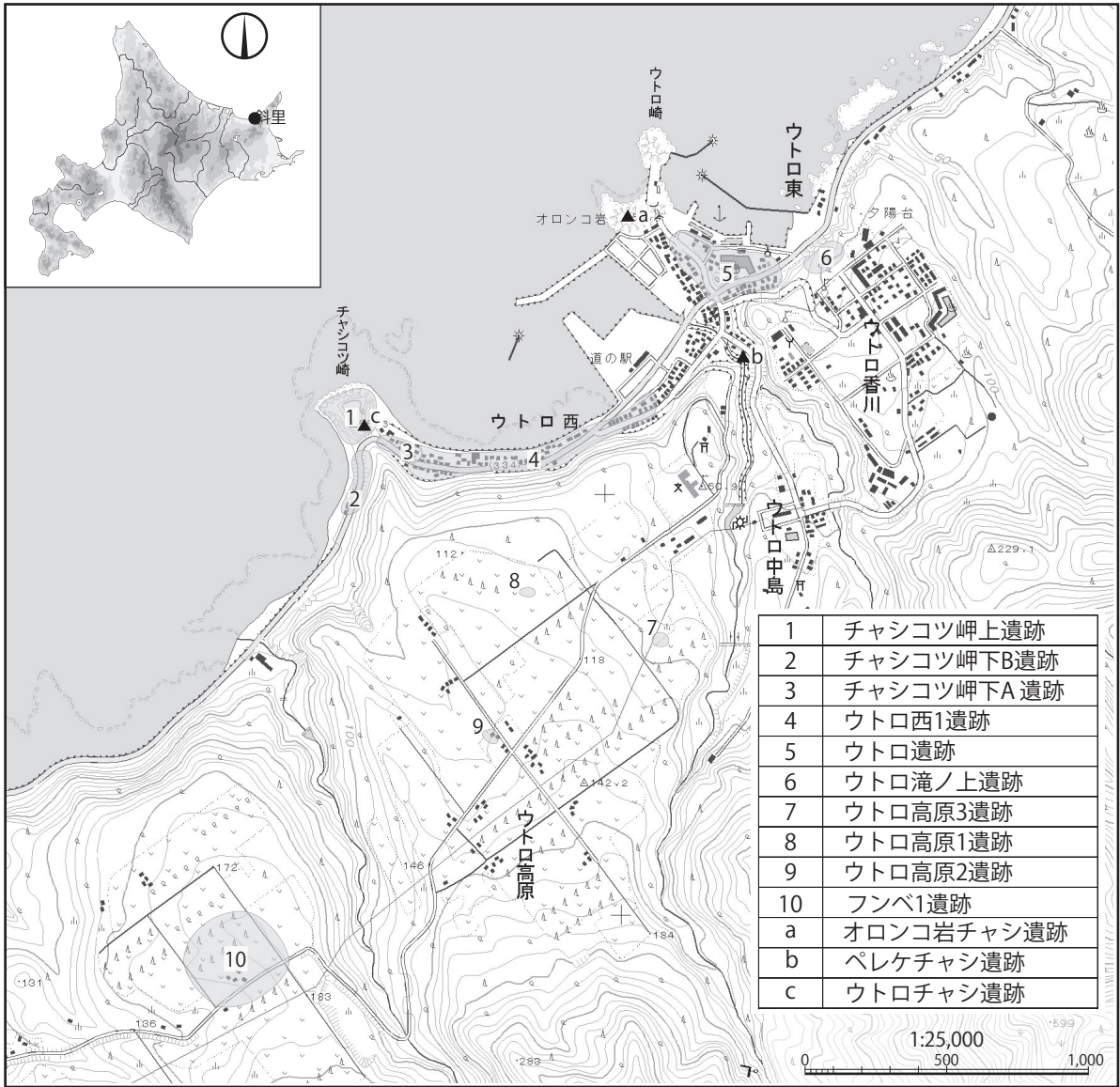
チャシコツ崎上遺跡は、北緯44度04分00秒、東経144度58分40秒、ウトロ市街地の南西方向にあたる、海に突き出たチャシコツ崎の中位海岸段丘頂部の平坦面上に位置する。遺跡の周辺には火山性の台地をはじめとする中・低位の段丘面、海浜地などの低地、台地崖、岩脈地形、地滑り地形が見られる。

チャシコツ崎には層序の下位に遠音別川層、上位にウトロ層が分布しちょうど地層の境界の位置にあたってい

る。堆積物主体の比重の軽い遠音別川層の上に比重の重い水冷破碎岩が分布しているため、重力的には非常に不安定である。そのため、岡（2010）によると近くでは地滑りや土石流複合体が観察され、地層がブロック化しているのも観察された。また、チャシコツ崎のすぐ陸側に位置するウトロトンネルの掘削の際にはトンネル部に断層粘土が大量に分布していることが判明した。

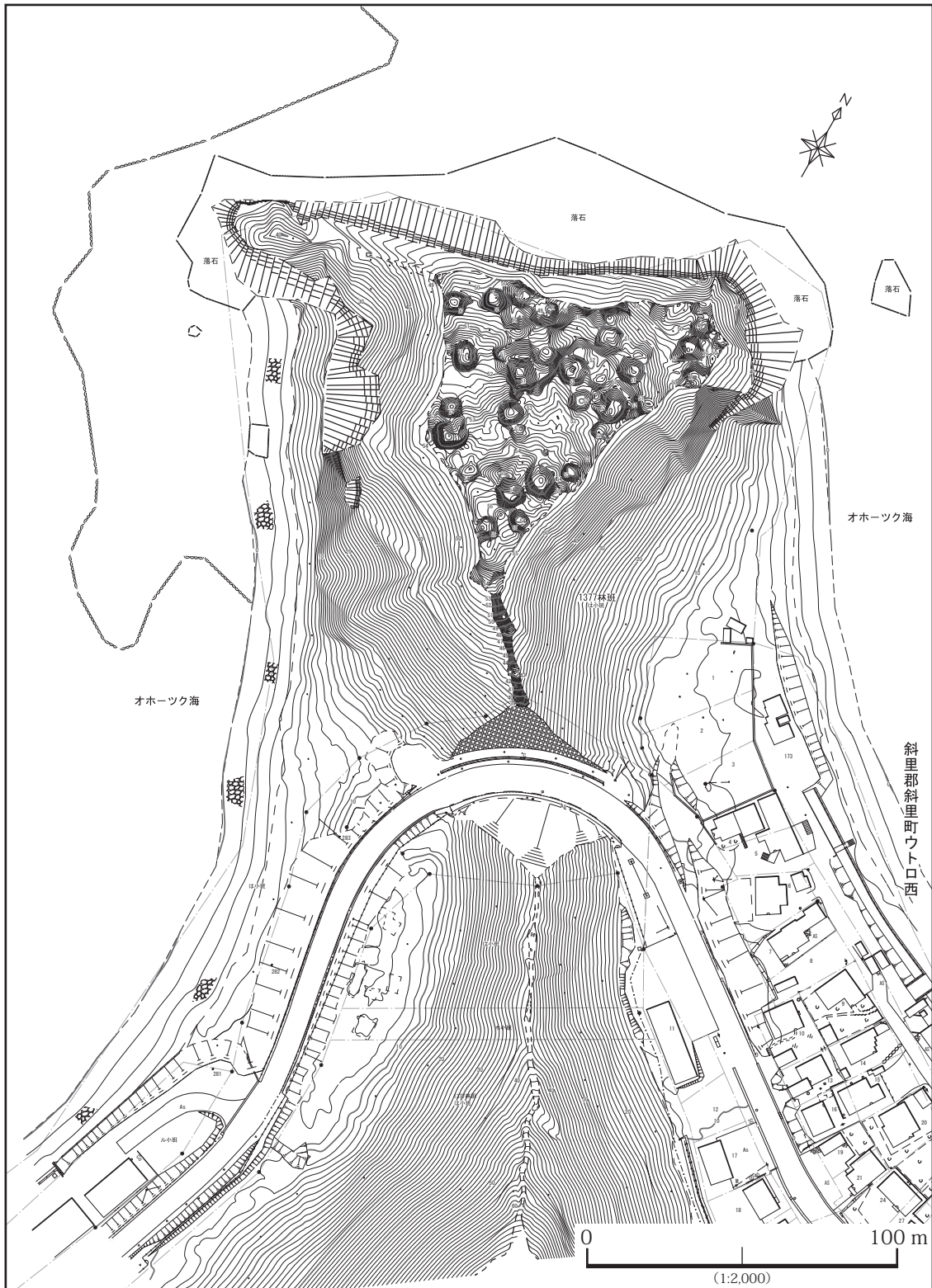
知床半島では、陸上の火山活動による半島中軸部の上昇により地層は海側に傾斜している。ところが、チャシコツ崎の先端部では地層が陸側に傾斜しており、例外的な外観を示している。また、チャシコツ崎の海食台にはブロック化した地層が落下しており、地滑りによるものと推察される。さらには、岩脈が発達した水冷破碎岩が分布し、ウトロ層の活発な活動の場を示しているが、その層序上、上位に当たる海面上のチャシコツ崎では下位に遠音別川層の上部があり、さらにその上位には海底火山活動が始まったウトロ層の下部が分布している。チャシコツ崎海食台と海面上のチャシコツブロックは時代が逆転した不整合の存在が推察される。そのため、杉本ほか（1961）の5万分の1地質図「ウトロ」ではチャシコツ崎の付け根に断層を引いている。以上のことより、チャシコツ崎全体が山の高い部分から滑り落ちて現在の位置で大きなブロックとして「岬状地形」になった可能性が高い。ウトロ国道334号線改良工事に伴うウトロトンネル掘削時の地質調査で判明した大量の断層粘土はその時のすべり面の可能性がある。またチャシコツ崎先端部の地層の傾斜が逆なのは、地滑り先端部がまくれ上がった結果とも考えられる。

（松田功）

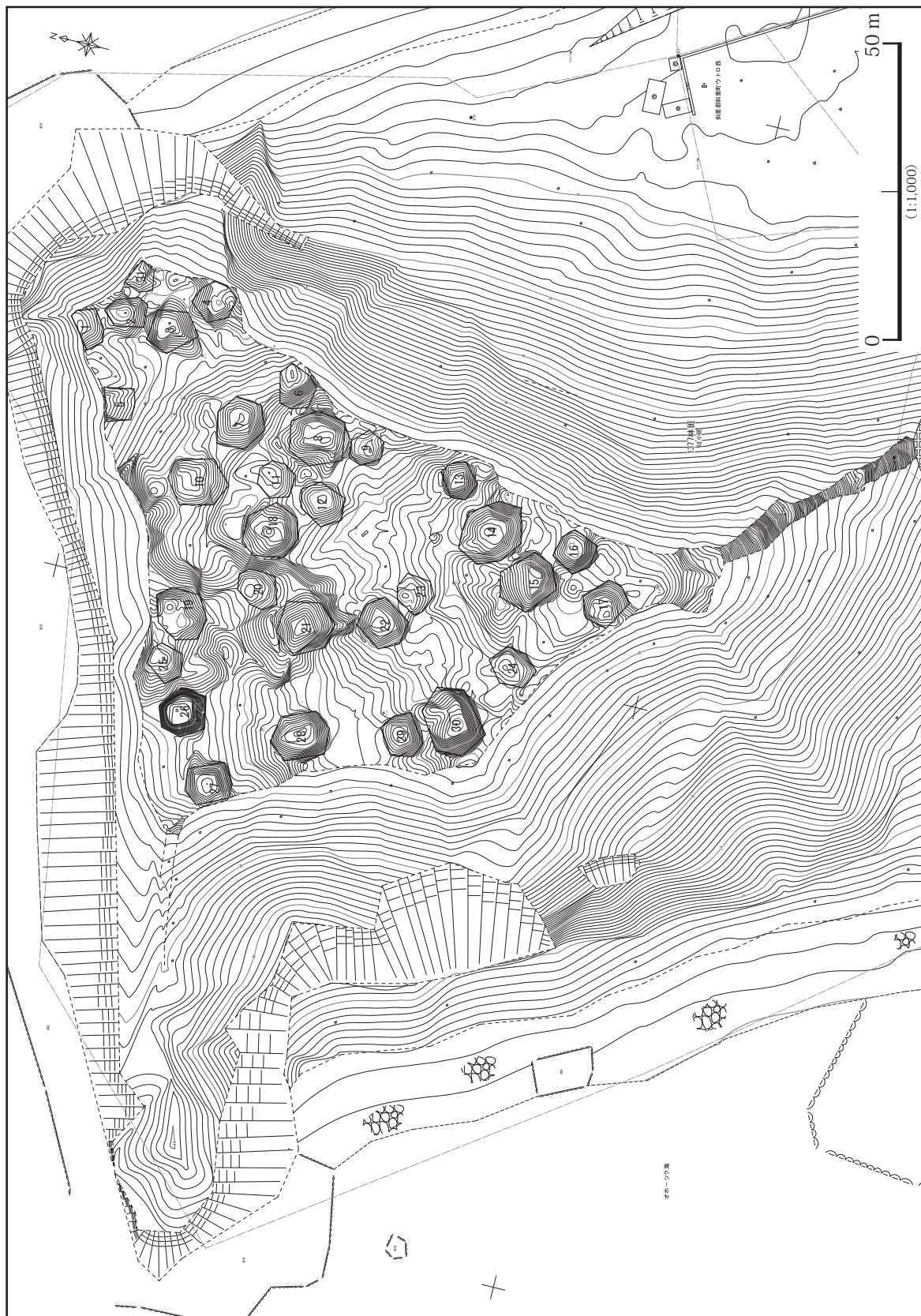


第1図 周辺の遺跡





第2図 地形測量図



第3図 竪穴住居跡分布図



## 第4節 歴史的環境

### 1. 地名の変遷

チャシコツ岬上遺跡のチャシコツとは、アイヌ語でチャシ・コツ・エト（砦のある岬、砦跡の岬）と言われるが、初出とされるのが、松浦武四郎の東西蝦夷山川地理取調日誌の安政五年の「戊午 志礼登古日誌」である。この中の記述には、「赤壁崖峨々として海中に突出し、其れに撃する潮勢乱れて玉を飛ばし、上には緑樹陰森として枝を垂、その眺望実に目を驚かせり。此処むかし土人の城壘有りしと。…（秋葉1985）」とありチャシコツ岬の様子が詳しく記載されている。なお、安政五年より前の文献などには地名としての表記はない。その後、明治30年の北海道庁陸地測量部5万分の1地形図には「チャシコツ」と表記され、大正13年測量で昭和8年発行の第日本帝国陸地測量部仮製版5万分の1地形図では、すでに「チャシコツ岬」と表記され、今日に至っている。

チャシコツ岬と呼ばれるようにチャシ（アイヌの砦跡）があったと考えられるが、現況ではその痕跡である壕などが確認できない。昭和29年のウトロ周辺写真（下の写真）を見ると遺跡の背後にある中位段丘面と細尾根でつながっており、僅かに溝のようなものも確認できる。この溝がチャシの壕とも考えられる。現町道の前は、国道、道道であったが、最初の道道建設の折にこの溝の部分を開削し、壕が失われてしまったものと考えられる。

### 2. 周辺の遺跡と概要

チャシコツ岬はウトロ地域に包含される。チャシコツ岬の周辺には、チャシコツ岬上遺跡、チャシコツ岬下A・B遺跡、ウトロ西1遺跡が確認されている。ウトロ地域全体を見ると縄文時代早期～中期の遺跡は中位海岸段丘上、河川沿いおよび低位段丘の河口付近を中心に分布しており、幌別河口遺跡(其田・河野編1980)、ウトロ遺跡(河野1955)、ウトロ高原1～4遺跡、チャシコツ岬上遺跡(河野1955、平河内編2014)などが知られている。縄文時代後期～晩期の遺跡は、海岸の低位面に見られるようになり、ウトロ遺跡(松田編2011)、チャシコツ岬下B遺跡(松田編2002・2011)、幌別河口遺跡などが知られている。続縄文文化期も縄文晩期と同じく、海岸を中心とした低位面に遺跡が集中する。ペレケ川縁辺やウトロ中心市街地に集落を作るようである。オホーツク文化期は、ウトロ市街地やチャシコツ岬の海岸低地面とチャシコツ岬上(中位段丘面)に遺跡が集中する。トビニタイ文化期及び擦文文化期は、ウトロ遺跡やチャシコツ岬下B遺跡で遺物の散布が認められるが、竪穴住居跡は、トビニタイ文化期のものしか見つかっておらず中位段丘面上のウトロ滝ノ上遺跡(駒井編1964)でのみ検出されている。

(松田功)



写真. チャシコツ岬のようす (1954年)